

山形短期大学民話研究センター資料叢書

# ちようじやのむこ

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

# ちようじやのむこ

編 武 田 正

# ちようじやのむこ

長者のむこ

四

つともれチヨン

一三

オト昇天

二二

こうれん

三〇

じつさまの手

三七

からすぼたち

五一

神楽ぶち

五八

すずしい風がくされた

六三

八十一まい目の田

六七

私の民話再話論  
あとがき

七一  
八四

## 長者のむこ

むかし、

ある村の長者さまに、ひとりむすめがおった。そろそろ年ごろになったので、長者さまはむこをさがしてやらなくてはとおもった。

長者さまはかんがえた。

「田は千刈、畠も千刈。それにこの山もおれのもんだ。よいむこでないと、いろりは守れねえ」

長者さまは、またかんがえた。

「よし、おれが出す三つのなぞをとく男がいたら、おれのむすめのむこにして、いろりを渡してもいいぞ」

村の入口と、長者やしきのまえと、それに山の神ののぼり口に、立札を立てた。  
〈長者のむこになりたかったら、なぞときにこい〉

春のわらびがおわって、星のふるような夏がきた。それからまた、秋の祭りだ  
いこの音もきえて、わたみたいな雪がおちてきて、田んぼの上につもった。

「おじけついたか、だれもこねえ」

長者さまはいばった。

もう、立札をたててから一年になる。

むすめは空を見上げてなげいた。

春のまつりがやってきた。

そのばん、山からひとりの若者がきて、おどりの輪に入った。むすめは若者と  
おどりつづけ、夜があけたとき、むすめと若者は愛しあうようになっていた。

「このひとなら、千刈り田んぼだけでなく、村の水も守ってくれるにちがいない」  
むすめは、若者を家につれてきた。

長者さまは、むずかしい顔をして、わかものを見た。

「よいか、蔵のなかにある鍬のかずはいくつだ。さあ、おれがたばこを三ふくす

るあいだに、こたえろ」

大きな蔵の戸をどんとあけて、若者に見せた。うずたかくつのである鍬を見て、若者はきもをつぶした。

そのとき、うらのほうから、むすめの歌がきこえてきた。

千丁の鍬をかぞえるにや

一丁と二丁で三丁だぞ

三丁と七丁で十丁だぞ

十とおずとおつ十で百丁だぞ

百ずつ十なら千だぞや

ねろねろ やーど

「長者さま、鍬は千丁だ」

若者はこたえた。長者さまはびっくりしてしまった。まだ、たばこに火をつけたばかりだった。

「んだげんども、もう二つのなぞが、のこつとるぞ。このなぞがとけたら、むこ

にするぞ」

お茶を入れて、うまそうに一ぷくすると、長者さまは、若者を見た。

「そろそろ、田んぼのしごともはじまる。田んぼの畔ぬりだが、千刈り田んぼにや、からすがくる。からすの足あとをつけないで、一日で畔をぬれるか。さあ、あしたじゆうにぬってみろ」

若者は、山までつづく田んぼを見た。からすが、むれをなして、お宮の杉林からさつとやってきて、人がとおると、ばさばさ、ばさばさと、とびたつ。

どうせ、長者さまのむすめのむこにやなれぬ、山へかえろうとおもった。

千刈り田の畔ぬるにや

朝さがりしねうち、畔けずれ

昼あがりしねうち、土くつつけろ

夜あがりするめえに

さつさらさつと、なでてこい

そうすりや、からすコ、あとつけぬ

ねろねろ やーど

むすめのうつくしいこえが、かぜにのつて、お宮の林のほうからながれてきた。若者は、あつとおもった。からすが眠つてゐるあいだに畔をぬれというんだな。

次の朝、だれよりも早くおきると、日の出ないうちに田んぼに走った。畔をけずった。

一まいけずった。三まいけずった。三まいけずつて汗をふくと、力がわいてきた。四まい、五まいとけずつて、むすめがむかえに出たときには、若者は、いちばんおくの田んぼをけずっていた。

昼までに、むすめの歌のとおり、土を、ぺたぺた、くつつけた。

日がしずんで、からすがお宮の杉の林にもどつてゆくと、若者は、さっさら、さっさらと畔をぬりはじめた。

月の光のなかで、むすめはじつと、いつまでも、若者がはたらくすがたを見ていた。

朝になった。

もう田んぼの畔は、すっかりかたくなつてしまい、からすがえさをとりにかけても、畔のうえには足あととつかない。

若者は、長者さまがおきるのをまつた。

「長者さま、長者さま、見てくれ」

なるほどと思つたが、長者さまは、ここであまいかおになつてはいけないとかがえた。

「いやいや、なぞはもう一つあるぞ。これがとけねば、めんごいむすめをやるわけにいかぬ」

長者さまは、はらをつきだして、目のまえにかぶさつてくるような山を見あげた。

「あした、あの山のとっぺんから、ふといドンコロ丸太をころがすから、下で丸太をうけとめよ」

若者は、うつくしいむすめのことをおもつた。

「よし、きつと、うけとめる」

そういったものの、山のふもとに立った若者は、竜がのぼったあのようなように、きり立ったがけを、ごろんごろん、ころがってくる丸太をおもって、体がふるえた。

そのばん、むすめは若者のところに来た。

若者は昼のつかれで、たおれるようにねむっていた。

むすめは若者に、着ものをぬいでかけてやった。目をさました若者は、むすめの手をにぎった。

しかし、あしたのなぞのことをおもうと、若者は、これでむすめを見るのもおわりだとおもった。丸太につぶされてしまうにきまっている。

せなかをなでってくれる、むすめの手はやわらかく、あたたかかった。

「まんず、ゆっくりねむれや。ゆっくりねむって、力をとりもどしてや」

若者は、こっくりうなずいて、目をとじた。むすめはうつくしいこえで、子もりうたをうたってくれた。

裏の山のどんころは

紙ではったるどんころよ

なんぼ、ころんできたとても

どうともない、どうともない

ねろねろ やーど

むすめは、なんども、なんども、若者のそばで、歌をくりかえしうたつてくれた。  
た。

いよいよ、つぎの朝はやく、長者さまはたかい山にのぼった。若者は、きり立つたがけの下に立った。

むすめはいった。

「腹にうーんと力を入れてや、そうすりや張子のどんころと、おんなじじや」  
山の上から長者のこえがふってきた。

「よいか、どんころをころがすぞ。しっかりうけるんだ」

「はい」

どころ丸太がごろんごろん、音を立ててころがってきた。若者は腹にうーんと力を入れて、がきつとうけた。

「長者さま、さあ、どんどんころがしてください。ところで、どころはどこにつんだらいいか」

「そのへんにつんでおけ」

長者さまはすっかりよろこんだ。

長者さまのむすめと若者のけっこんしきが、村のしゅうをみんなあつめて、はなやかに長者さまのざしきでおこなわれた。

ふたりは、村の水をまもって、一生しあわせにくらしたそうな。

どんぴんからりん　ねっけど。

## つともれチョン

### 1

なんでおらがへつともれチョンへなて言れつかわかんねがつた長吉だが、若い衆まで長吉ば「つともれチョン」という。

そんときのおひやかした目のいろで、長吉には「ええこと言つていねえんだな」てことがピンとくる。

長吉にや、ずっと前から、お父はいねえ。んでも爺つちやの子でもねえ。いつか爺つちやに、きいたことがある。

「ほんとは、爺つちやは、おらのお父だべえ」

そしたら、おらの頭ばぐりぐりとこすつて、

「ええ、ええ、そだなこというな。そだなこというな。おらがめんごがつてるだから」

なていうたが、爺つちやから、ぐいっと抱かれると、はだけた胸の熊の毛みてえ

な毛が、頬<sup>ほ</sup>つぺき、じやりじやりとして、何にもいうことがなくなってしまうたけ。

2

「ええか、爺っちゃんかえるまで、外にでるんじゃねえぞ」

爺っちゃんかざらざらした大きな手で、おらの頭をぐりぐりつとこすると、キイツとした目を、あけっぱなしの板戸から外に向けて、サシコしやうぞくのぶあつい装束で走り出た。

雨が棒みたいにふるちゅうのは、このごんだ。

長吉は、川のほうに走って行く爺っちゃんのかっこうがおかしくて、戸の口から手のばして、雨を掌で受けながら見ていた。

「爺っちゃんもわかいぞ。爺っちゃんも若いな」

長吉はいつも爺っちゃんから、「チヨンは若いんだぞ、メソメソするんでねえ」と、元気づけられんのを思い出して、爺っちゃんに口の中で言ってみたが、ちよつ

とばかりうまい言葉のような感じだった。

「ふんとに、今朝はおらのお父ぐらい若かった」

お父のこと口にして、長吉はへんてこな気持ちになった。

3

爺っちゃんといたが戸板にのって帰ってきたとき、運んでくれた隣さくの作じじが、爺っちゃんに口をとんがらせて、大きな声を立てた。

「じじ、じじ、サキが助かったぞ、サキはちゃんと助かったぞ。ちよつくら泥水のんだぐれえで、すぐ息吹き返したぞ。それにな、人形も岸に流れついとった」

長吉は何のことだべと思つたげんど、真青になつて戸板さ横になつてる爺っちゃんが、肩で大きな息ついてるのを見て、爺っちゃんにしがみついて、ぷるぷると体がふるえて、どうしたらよいかわからなかった。すると、目をとじたまんまの爺っちゃんの声が、作じじのよりも大きく聞えた。

「長吉、お前は若いんだぞ、メソメソするんでねえ」

それでも、「チョン」でなくて、「長吉！」なんて呼ばっだんで、こいつあ、うんと悪いんだなって思った。

「ええか、おれあお医者さま呼んでくつから、お医者さま来るまで、お前見てるんだぞ」

長吉はすぐ、ぼやんとしていらんねなと思った。

「作じじより早く走って、おら行ってくる」

「んだ、爺っちやの子だから、お前の出る番だ」

作じじは肩をぽんと叩くと、「チョン、行け」と肩をおつつけた。盲縞の着物の裾まくつて帯にはさんで、裸足のまんまとびだした。んだ、おれは爺っちやの子だ。つともれチョンだ。そう思うと急に足さ力が入った。走りながら体がひとかさ大くなるような気がする。ぐんと右腕はグイッとうしろにふると、右足がぐんと出る。

「お医者さま、つともれチョンの爺っちやが、ぶっ倒れた」  
年寄りお医者さまは、長吉からわけを聞くと、

「おお、おお、チョンの爺さまが。いまサキのお父から聞いた。そろこいつ、ま  
ず持つて行け」

もう用意してあつた薬箱をふところさ入れて、お医者さまをおぶうと、とつとつ  
とつとつと走った。

「お前もえらく大きい若い衆になるぞ、力も出たな……」

そんなことはどうでええ、はやく爺っちゃんのだこにもどらんかねと思うと、お  
医者さまの尻に当<sup>あ</sup>てがった長吉の手は、まるでお医者さまの背中まで届くぐらい  
大きくなった。それに見合うように、体も、もうひとかさ大きくなった。

「いやいや、あんまり早くて、おらの方が目が廻りそうだ」

ドンと家の中さ踏みこんだ長吉は、そのあと何をしたもんだか、かいもくわか  
んね。それ、湯をわかせ。それ、水を汲んでおけ。それ、メスをきれいに拭いて  
こい。カマドに割り木を突っこめ。手拭はきりつとしぼれ。いわれたまんま、と  
きどき爺っちゃん顔のぞつてみるが、目をつぶつたまんま動きもしねえ。作じじ  
はもうさつきから氣抜けして、へたり坐りこんだまま、お医者さまのいうのに、

いちいちうなずくばかりだ。

そこに、とつぜん、爺っちやの大声だ。

「ああ、長吉」

「爺っちや」

「お医者さまも聞いておくやれ。作じじも頼まっでおぐらせえ。長吉のことだ  
が…」

作じじは急にポロップポロツと涙こぼした。そんどきの爺っちやの声は耳の中に  
じいんと残って、そのこと思い出すたんびに胸が熱くなつて、しょうがない。

「サキあ、人形、川に流して、そいつ取つどて、水増しの川に、落つだだ。助かっ  
てええがつた」

作じじの方が病人みたいな声で、爺っちやの肩を抱くようにした。チョンもわ  
かった。

「川の真中から、村の衆の方にサキをぼーんとぶん投げだんだぞ。あの力は若い  
衆だつてかなわねえ」

「うん、よかったな」

そんどの爺っちゃんやはその話はじめだっけなあ。それから口を動かすが、声になったり、なんねがったりだった。長吉は持つてだ空の手桶を落してしまった。んと、作じじが長吉をその場にむりやり坐らせた。

「ええか、長吉のお父は何人も人助けしたんだもんな。鉄砲水あったとき、お父は長男の春吉を後まわしにして、才太、お花、お万を泥の中から助けたんだぞ。お父がもう一度もどって一人残った春吉を引っ張るべえと、もう一度泥の中にもどったとき、二度目の鉄砲水で春吉もお父も流さつて死んだんだ。つともれのお前のことを、なんぼ心配して死んだんだか」

作じじは、爺っちゃんに代ってしゃべるあいだじゅう、爺っちゃんが三べんも、大きくうなずいた。

お医者さまはそつと爺っちゃんの顔に白い布をかぶせた。

「ええか、この話わかったら、チョン、思いきり泣け。したば、こんどは肝きもつ玉

のでっかい子になるんだぞ」

作じじの頭の方では、涙を拭いたにぎりこぶしで、ごりごり長吉の頭をこすりつけるやりかただ。

4

つともれというのは、山うばにさし上げる子どもちゅうもんで、むかし、いっぱい子ども出ると、いらねえ赤子はみんな山の主の山うばに、つとに入ってくれてきたもんだ。おれあ、お父がどんな苦労しても、神さまから授かったもんだからちゅうて、つとき入れて捨てんべと親族しゅうがいうても、お父がゆるさなかつたちゅうだ。つとから、落ちこぼれて生きのこつたもんだそうだ。

作じじがようやく涙をぬぐって、爺っちゃんがやってくれたように、ぐりぐりつて、長吉の頭をなでてくれた。

「つともれチョン、外に出れ<sup>で</sup>」

長吉の手をぐいぐい引っぱって外に出ると、まだ川の音がゴウゴウしてるに、

空には一つ星が出た。

「なあ、あの星だべ。爺っぢやの星はあの星だべ。お前が、へよし、ええことさんなね」へよし、悲しんでばりいらんね」と思うと、爺っぢや星が前の方を照らしてくれるんだ。そういう星になったんだ」

作じじは右の指できらつと光る星をさしながら、ぼたぼたと涙を流した。その涙の一つぶが、おらの顔にかかったが、おらは爺っぢや星をギイツとにらみ返して泣かねがった。

「おらあ、つともれチョンだ。爺っぢや、長吉なんて他人<sup>ひと</sup>ごとみたいに言<sup>や</sup>ねで、チョンていえ、チョンていえ、そしたらおらは泣かねでいられるんだ」

## オト昇天

秋祭りがくると、オトは五つになる。

五つになった日に、オトは昇天した。

お父が、オトを、目に入れてもいたくないといってるが、ほんとに目に入れたら、いたいべなあと、オトはあぐらをかいてるお父の足のあいだに、とぷんと思っていた。

「なんだか、笛のちようしも、今年はうまくひびかねえんじゃねえか」

お父はひさしぶりに帰ってきて、晩めしを食い終って、一服つけると、おつかあに声ばかりかけた。お父のあごひげを下から見上げたオトは、一本だけひよろひよろと伸びているひげをつまんで、思いつきり引っぱった。

「ウン」

と、しぶい顔になってから、オトの目と合ったお父の目は、急に笑顔になった。

「んだべに。年貢もまだ終らねえ家があるでよ、笛吹き衆も三人しか集まんねちゅ

うごんだ、そう佐助サがいうとった」

オトは、その三人が佐助サと八郎サと、それから正太郎サの三人だと、すぐわかった。なるほど、オトの耳にも、なるほど息の切れるみたい、ミミズの泣いてるみたい、ツー、ツー、ツーとしか聞えない。

ピクッとお父の体ふるえがきたみたいだったから、オトはお父の顔を見上げた。この前の、部落衆のよりあいに、佐助サが、「おらが迎えに行ってくる。おらあにヤマ行者さまを迎えにやらせてくろ」といって、お父が腕ぐみしたときの顔つきと、また同じになったように見えた。

秋祭りにや、ヤマ行者さまがやってくる。ヤマ行者さまのあぐらは、お父のよりもふかふかして、きもちがいい。お父のようなひげがなく、いい匂いがする。変てこりんなカタコトでしゃべりながら、オトの頭をなでてくれる。

「オト殿いうたか。大きくなって、日本のかかさまになりなされ、早く大きくなって日本のかかさまになりなされ」

オトのかみの毛ば、でっかい白い手でなでてくれる。でっかい大きい白い手だ。それにお父の手みたいに赤ぎれなどなくて、ぷっくりしてる。

禁制になったキシタンさまを、秋祭りの村中のにぎわいをうまくつかって、村の衆がよぶようになったのは、いつからか知らないが、オトには何となくわかっていた。

「早くねろよ、子どもが早くねねえど、山から白いんこがくるでえ、山につれていかれるどお」

おっかにいわれて、オトは寢床に入ったが、目はますますさえてしまった。

「んだ、お役人に佐助の顔は知られているで……」

「笛吹き佐助が舞台にいねえでは、すぐお役人がさわぐべえよ」

静かだが、いろりのまわりにある熱気をオトは感じとっていた。庄屋の五兵衛じいの声だ。

「なあ、佐助でなくて、だれかおらぬかのう」

「ほんだずな」

あいづちはお父だ。

「ただな、何も知らねえ行者さまが、秋祭りの笛や太鼓で部落におりてきたら、困るでああ」

「うーん」といったきり、いろりの方からは音がきこえなくなった。オトは目をつむった。

まっくらな中で、ふたたびオトが目をさましたときには、押しころしたうなりが、地からひびいてくるような気がした。だがそれがギリシタンのお経だとわかると、オトはすぐ口の中で、その後をついでみた。

万事かない給うデウスをはじめたてまつり、

いつもビルゼンのサンタマリヤ、サンミゲル、

アルカジョ、サンジュアン、…。

おっかとはときどきまちがって、言葉が口の中にもぐるし、お父は大きい声で別

のことをいってしまふ。オトは体が温あつたかくなる。「オト殿はうまい、きれいな声だ」と行者さまから、ほめられたことを思い出したからだ。オラシヨにはいろいろあるが、「食後のオラシヨ」がいちばん、オトの好きなオラシヨだ。だって、「食前のオラシヨ」は腹がへつてるときだから、ついいそいでやってしまふから。腹がへるつてのはやっぱり困るなと思う。

それでも、ちかごろ集まるときまつて「あやまりのオラシヨ」ばかりやつてるのは、きつとお父がへまをやつたんだらう。

ところが、今晩は、いつまでもいつまでも、「あやまりのオラシヨ」をなんどもなんどもくりかえすだけだった。

「佐助がだめなら、おらにするべえ」

と、お父の声がした。

「そりや、高持百姓惣代がいなはんじや、役人よりも村の衆がさわぎだすべ」

これは五兵衛じいだ。

「オトはまだ子どもだしなあ」

急にお父の声が弱々しくなつて、だまつてしまった。オトはそのとき、障子に紫色の光を見た。それが金色に変わったように思った。その光がオトの方に近づいてくると、オトの下腹に力がこもるみたいだ。

夜祭りの晩は急に寒くなった。太鼓と笛のひびきは陽気だ。

オトもおつかとお宮さまに行つた。長い石段を下から見上げると大きな太鼓の音が降ってくるみたいで、そいつにしげんと足が合ってくる。ドンドンと鳴るとちよこちよことオトは石段をのぼつた。みんなで九十九段、この中休み場まで六十三段だから、もう何段のこつてゐるだろうと、頭の中でかぞえると、きゆうに太鼓の音がぶい音をのこして鳴りやんだ。かわりにあおい顔の部落衆がどどどどどおとと石段からあふれてこぼれてきた。その後を赤ら顔の役人がぞろぞろとやってきた。

「どけ、どけ！じやまする奴はひつとらえるぞ」

「佐助はどこだ」

「この奴が祭りのさわぎのうらかいて逃げようとしたんだ。番所の目ごまかそうとしたんだ」

勝ちほこったお役人は部落のひとつとをみかえした。オトはお役人の顔に赤鬼をみた。オトには佐助サがヤマ行者さま迎えに行つて見つけらつたんだと思つた。「なら、そいつ知らないヤマ行者さまが、のこのこ部落さ降りてきて、あの赤鬼の役人につかまつてはいけねえ」

オトの心臓が急にドキドキした。

「おらも、もう五つになつたんだぞ」

オトはぎゅつと口びるをかんた。

オトは走つた。行くさきざきで、ぼおつと道が明るくなる。オトは走る。オトの行くところは草がなぎたおされているように、道がひろがる。オトは走つた。山道の石はきれいに敷かれていて石畳みたいだ。オトはまた走る。星空がみえた。山の木の間から、大きい星が山頂をてらしてくれた。ヤマ行者さまのいられるの

は、あの山の神のほくらだ。星がいちだんと輝いた。

「ヤマ行者さま、オトがきました。オトはもう五つになりました」

ぎいっと山の神のほくらの戸があいて、ヤマ行者さまはこつちを向いた。「おう、おう」とヤマ行者さまが手をあげた。オトの目の前にいくつもいくつも花火が散った。

「佐助サがくることになってたども、役人につかまったから、オトが迎えにきました」

オトの体は、ヤマ行者さまに近づくとき、あつくほてってくる。体から花火がパチパチなった。

大きい流れ星が一つ東の空に流れた。

神さまにめされたオトは流れ星になって空の向うに消えた。

こ  
う  
れ  
ん

1

山形の赤湯温泉に「こうれん」という、子どもの頭よりずっと大きいセンベイがある。手焼きの、うすい醤油あじのほんのりした香りのセンベイだから、手に持った子どもは、ウチワのかわりにしてみたり、大きい<sup>ゼニ</sup>銭にみたりしてあそんだあとに、ぱちんぱちんと割って、みんなで分けて、バリバリと食う味は忘れられない。

2

こうれんは、まだ八つのむすめだった。越後の人買いがよく通ったもんだが、人買いに買いとられて越後に行く途中だった。宿賃おしさに、人買いは狸森の岩あなに泊った。

「ええか、ここがまんしてくれな」

人買いはやさしそうな声を出した。

お父がねたつきり、妹二人のせわをみなねばならず、働き口をみつけてやるという庄屋の口車にのって、人買いに買われたこうれんだから、逃げるなんて思うより、この男が親がわりだと思っていた。

「はい」

こうれんは人買い男のねるところに、ゴザを敷いて、その一段下の入口のところに、ようやく一人が膝を丸めていられるところを見つけた。ちっちゃな石をとりのぞくと、そこにちっちゃな自分のゴザをしいて横になった。あなの口から、ぽつんと一つ星がみえた。星がじつとこつちを見てると、こうれんは思った。

「この人を旦那さまと思って、つかえるんだぞな、ええか」

お父の苦しそうなしわがれ声が耳にのこって、耳たぶがあつくなくなってくる。涙がでてしかたなかった。

「なんだ、泣いてるのか」

人買いは、そんなこうれんを見て、かわいそうになったかして、少しばかり

しめった声にかわった。

「はい、旦那さま。だげんど、お父の病氣のこと思いだします。妹が泣かないでいられるかと思いだします。お父の腰をさすってやれるかなあて思ったりして」  
しばらくして、また人買いがきいた。前よりもつとやさしい声を出した。

「なに見てるだ」

「はい、旦那さま。星がときどきまばたくのを見てるだ、じつと、おらを見守ってくれてるから、こうれんは泣きません」

3

「おら、なあ…」

人買いは、ごそごそあなのおくの方から出てきて、こうれんと並んで、あなの端<sup>はし</sup>つこまで出てきて腰おろした。星がふつてきそうに東の空に輝いた。

「おめえぐらいな女の子がおっただ。そいつがメクラになつてなあ、瞽女<sup>ごぜ</sup>にしてもらった。トミっていうてな、そいつが山形の方さ行って、もどつてこねえとい

うもんでなあ」

「そんじゃ、旦那さま。トミさんば探しに来ただが」

「うんじゃ」

トミを探しに来て、食いつめて、人買いになったんだというつもりだったども、そいつはいわなかった。

「夜はさびしいげんど、ええなっす。お父も今ごろさなっど、ようやく寢息たてる」

ふりかえった人買いは、そこにこうれんの声だけあつて、姿がないのを見てびっくりした。あなの中が明るくなってる。星の光どこでない。青白く光ってる。その光になれてきて、こうれんがちっちゃくなくて、星をじっと見上げているのがわかって、ぐいっと抱きよせた。

「こうれん！」

「はい、旦那さま。すっかり心が洗わっただす、ありがとうございます」

人買いは、とつぜん、血をはくような声でいった。

「こうれん、おらの子になってくれ。おらの子になってくれ、なあ、おら、今までわるいことした、おら人も売った。人をだましたこともあった。んだどもこいつ、みんなトミを探すためだった」

「はい、旦那さま。旦那さまはそんな人ではねえ。旦那さまのそばで坐っていっど、お父やお母、それに妹のためにどうしてもちゃんと生きていかんなねていうこと、よつくわかるっす」

「こうれん！」

二度目に人買いがこうれんを抱いたとき、二人のまわりに、パチッパチッと光がはじけた。人買いは今まで体にくっついた、この人買いに殺されたり、いじめらった人の怨霊が一度にとび出して、はじめてしまったんだ。

二人はじつと抱き合って、一晚、狸あなですごした。すうつと風が吹いてきたので、こうれんは目を覚ました。人買いは死んでいた。こうれんの足もとから、白い鳥が飛び立って白竜湖の方さ飛んで行った。

白い鳥は人買いのすっかりきれいになったところのようにこうれんにみえた。

人買いの骨はちっちゃい骨つぽに入ってしまった。耳に当てると、カラカラと乾いた音をたてた。こうれんは悲しかったが、悲しさにまけていられないと決心した。とにかくお寺さんに納めねえでは、旦那さまに申しわけが立たないとおもうと、お寺をさがして、トボトボと切れた草履を引きずってあるいた。腹がへつてくたびれて悲しくなると、その骨つぽに耳をあてる。乾いた小さい音が、

「生きるんだぞ、生きるんだぞ、ええか」

そういつづけているように聞える。「あの晩に、本当のしあわせがわかったよ、ありがとう」ともきこえた。

めぐりめぐって、こうれんはまた赤湯にきた。足がなえてしまつて、動かそうにも動かなくなつた。ようやく探しあてたお寺さんの前に行つて、そこでぶつたおれた。骨つぽをぎつちりにぎつていた。カラカラとかすかに骨つぽの中から音がきこえていた。

こうれんの上にヤキメシを供えてくれたのは、どこかの知らないおばさんだ。  
「なんぼか、ひもじがったべ。きつとこの寺に骨をおさめにきたんだべに、ひも  
じい思いをさせて、わるかった、さあこれをお食べ」

5

カンコロメシというのは、食べのこりの御飯を流したのを、カンコロにあつめ  
て、それを目干しにしたもんだ。臼で粉にしたのを、センベイに焼く。

こうれんの死んだところにお社が建った。こうれんに供えられたヤキメシやカ  
ンコロメシを粉にして、こうれんセンベイという。割るとパチンという乾いた音  
を立てる。

## じっさまの手

じっさまの手はでっかい。やつでの葉っぱみたいにでっかい。それに竜のうろこみたいにながさがさだ。

いろりの火にかざした腕などは、丸太ん棒みたいだ。

「なあ、おめえは人に親切にするんだぞな」

なんて、丸坊主のあたまをなでられるんなら、鬼から大根おろしでなでられるみたいに、ざらつざらつと、いたい。sonでもじつとがまんしてると、気持のほうがあつたたくなる。それというのも、じっさまのあのでっかい手が出会ったできごとを思い出すからだ。

じっさまの大きい手は、おらの前で、一、二度、とじたりひらいたりする。

「こいつを、熊ののどに、ぐいっと入れてやっただが、そいでなあ、熊のやつ、いっぺんで息がとまってしまった。傷もつけねえで、熊の皮をとったちゅうんで、村の評判だったぞい」

というのが、じっさまのじまんのたねだ。

「おらの孫だから、おとうがいなくつとも、さびしくはねえもんな」

そういうと、ぐりぐりと頭をなでくれたもんだ。だから、おらにや、じっさまの手が、いつも、おらの頭の上にあるみたいだと思うことがある。

「ほら、こんでええのか」

何かやったあとで、自分をふりかえったりするとき、今から新しいことをやるときにや、「よく考えてやるんだぞ」なんて、じっさまの手が頭をなでながら教えてくれる。

おとうは、おらの誕生日もこねえうちに死んだ。雪の深い、学校までの道の雪ふみをしながら、小学校の生徒の前に立って、学校のみえるところまで行って、雪崩にあつたんだそう。その話をおっかがやりはじめると、じっさまはきまつて、おっかに「待った」をかける。おっかの話は涙もろくなるからだ。

「雪崩はおっかねえ。足元からくずれるんだからな。あんときはおとうもえらかつ

た。子どもを渡してから、雪の中から体をぬいたらまた雪崩たんだから、雪の中で、自分が（くさび）になってたんだな。おつかもえなかったな。あれから、おとうの後をついで、部落の子どもに、毎年雪踏みしてくれて、もう十年も続けているからなあ。おめえも、人に親切にするんだぞなあ」

それから、また、ぐりぐりと頭をなでてくれる。

「大地というもんはなあ、動かねもんだ。動かねえもんは大切にさんなね。ちゃらちやら目の前のものにばり心をふらつかせているもんでねえ」

「じっさまのぐちが、また始まった」

と思つてると、また頭をぐりぐりとなでるじっさまの手だ。

そりや、春先の雪道のできごとだ。

「こんなら雪で、びつくらするもんでねえ。おらがガキのころはなあ、屋根の上までつもったもんだ。それに、雪上車もなければ、ブルドーザーなんてのもない時代だからな。雪はふりほうだい、積もるにまかせたもんだ。学校に行くにも、

犬ば先に立たせて行つたもんだ。学校に行くにも、犬ば先に立たせて行つたこともあつたなあ。犬ちゆうもんは、雪び（雪が岩の横にとびでて、中が空洞になつたところ）がわかるんだな」

吾妻山から吹きおろした雪の道を、熊狩りに行つたときのことだ。春が立つても雪のふることがある。狂つたようにふつた雪の上に点々と血のあとがある。

「ありや、おらより早く熊狩りに出た者があるな<sup>もん</sup>」

じっさまは、まわりをたしかめたが、そこにあるのは、大きな熊の足あとばかりなので、熊の足と反対の、谷の方に血をたどつて行つた。崖に、いまにももつかえりそうなブナの木が一本あつて、血はそこまで続いている。崖の斜面には、ぼつぼつと熊の足あとがあつて、ブナの大木の皮が、こすりつけたようにはげている。

ぼおつと開けた崖の下の方に、何か黒いものが、ちっちゃく見えた。

「あつ、人がやられてるでねえか」

じっさまの頭に、熊と人がかくとうした場面がひらめいた。じっさまは思いつ

きり崖の上から斜面にとびおりた。べたべたと体に雪がくつついて、ごろごろところがり落ちた。ついてきた犬もまたちっちゃな雪玉になって、じっさまのそばにころがって行った。

「あれだ、そら行け、アカ」

アカちゅうのは、じっさまの手足になつてた高安犬だ。どんどろにくもつた空から、今にも雪がふつてきそうだ。ころび、ころび行くと、アカはケーン、ケーンと空に吠えた。

「だめか、熊のちくしょう。おらがかたきをとつてやる」

アカの吠える声で、じっさまはわかった。かけよつて掘りおこしてみると、なんと野良着のままだった。

「なんぼ春近いつたつて、こんなかつこうで、この寒いとこにくるざあ、ねえべに」

雪の上にねせると、傷一つない。熊と争つたのではなかった。腹に手をつつこんでみると、ぬくもりが残っていたが、顔にはもう死がやってきていた。熊の足

あとがあるのに、そんなはずはない。死んでしまつてから熊がやってきたのかも知れぬ。そんなことを思いながら、上の道まで引きあげた。

アカが村の方を向いて、吠え立てた。

村のもんが走ってくるのが見えた。じつさまは大きな手を振つた。

「崖からおつこちたらしいぞお、おらが引き上げておいたぞお」

さらざらとカンジキを引きずつて登つてきた村人たちが、ひと目みて、

「やつぱり、五右エ門だ。やや子はいねえが」

と叫ぶのが、じつさまの耳にきこえた。

五右エ門はおっかに先立たれて、毎日乳もらいに、村のはずれの吉ばあの家に通つたが、昨晚の吹雪に巻かれて、山の方にまぎれこんだものらしい。

「やや子はいねえがつたが」

村の人は、じつさまにまた同じことをいった。じつさまはやや子が熊からやられたのかもしれない、とてもいえないので、だまつていた。

「雪の中に、まだうずまつてるかもしれないねえ。狩人さん、五右エ門の死んでたとこはどこだっけ」

アカはさつと崖の斜面を走りおりた。村の人も崖の上から雪の中に次々とびおりた。じっさまも飛んだ。

そこには、五右エ門がうずくまつて、あなが一つと、熊の体がすっぽり入るぐらいのくぼみが並んであるのがみえた。

あわてて、やや子を見落したもんだか、アカはそのくぼみをまわりながら、鼻をこすりつけてから、空に向けてケーン、ケーンと二声吠えた。

五右エ門のなきがらを村人が運んでいくのを見ていたじっさまは、そこから部落の方にはおりずに、熊の足あとをたどった。

もう半日も歩きつばなしだ。熊の足どりは、しゃくにさわるほど、すっかり雪原に続いている。もう吾妻山系から飯豊山系にきてしまっている。ブナ林がとだえて、ツガの林に入り、それからブナ林にまた入って行く。

熊の足あとが急に大きな円をえがき、行く手を大きな岩がさえぎった。アカはさっと飛んだ。熊の足あとは岩のうらがわに行つて消えた。そこに人が入れるかどうかの、あなが口をあけていた。アカはこんなときには決して吠えたりしない。足あと一つ一つに鼻を近づけ、匂いを頭にきざみこんでおこうとでもしているみたいだ。

じっさまは犬と反対がわから、穴に近づくと、穴の中から、ウウ、ウウ、ウト、熊の声がかすかに伝わってきた。じっさまは銃をかまえて体をかたくした。

「こんなときにや、枯枝を集めて、穴の前につみかさねて、火をかけるんじや、煙を穴の中に入れてやると、熊のやつあ、苦しがつてはいだしてくるところをねらうんじや」

じっさまはアカを手で呼んだ。

「そりやな、風の上手かみてに行くと、風に物音や匂いが運ばれて、感づかれてしまう。目はあんまりきかんが、耳と鼻はよくきくからのう、いつも風下からでねえといかん」

気の立っているじつさまは、自分の氣もしずめるつもりで、指をぺろりとなめて、風にさらしてみた。風の方角を知るにはこれがいちばんだ。

そんなときだ、穴の中から、やや子の笑う声がきこえた。

「あんときは、耳がおかしくなったんじゃないかなと、そう思ったもんだ。ときどきにはそんな鳴き声の鳥もあるもんだし、子狐が二、三匹いる穴の中では、そんな声にきこえることもあるからなあ」

じつさまの耳は、こんなときには、犬よりもするどくなる。やつぱりやや子の声だ。枯枝をいぶすわけにやいかない。熊との根くらべするしかない。犬がさわぎ立てるとまずいからと、じつさまはハケゴの干し肉を出した。

それからの一昼夜も、どうして雪の穴の中に待っていたか、じつさまにも記憶がなかったという。ぎつちりと銃をにぎって、穴の口をじつとにらんでいたにちがいない。

「犬ちゅうやつは、おらよりよっぽど冷静なもんだ。じつと穴の口を見てると、

穴の口が四角になったり、丸く見えてきたりするんだな。錯覚ちゆうもんだ。そのたんびに、おらが立ち上がろうとすると、アカのやつ、おらの着物をくわえてはなさんからな」

ここで、じっさまは、おらの頭をぐりつぐりつとなでた。

「なあ、朝の光が雪原にさつとかがやくのは、こんなちまちました村のなかじゃ、美しさはわからん。ぐつとくるぞ」

そんときだ。穴の口から、真黒い熊の毛が見えた。赤いものはみ出した。やや子の着物だった。やや子は手をのばして熊の首の毛をひつつかみ、にやあにやあ笑った。じっさまは、ねらいをつけた銃口をはずした。

熊は前足をのばして、くわえていたやや子の着物のえりくびをはなすと、やや子は熊の前足の上におりた。真赤な舌を出して、ぺろぺろとやや子の顔をなめた。やや子はくすぐったがって、にやあにやあ笑った。

「おらあ、このまま帰ろうと思ったよ。うん、親をなくしたやや子だもん、村につれてかえっても、どうなるもんでねえ、そんなことよりも熊といっしよに暮し

たほうがええのでねえかと思ってもみたよ。アカもそれを見て吠えもせんた。あ  
りやものわかりのええ犬じゃからな」

陽がかげると、熊はまたやや子のえりくびをくわえて、穴の中にひっこんだ。  
それからまた半日、じっさまは穴の口とにらめっこした。

陽がかたむくと、山はだをなめるように、つめたい風がおりてきた。穴の口か  
ら吐き出されるあったかい空気と、吹きこんでくるつめたい風がぶつかり合っ  
て、穴の口には白いもやがたちこめていた。じっさまは、じぶんの吐く息が見つ  
かったらと心配しながら、アカの背中をゆっくりなでていた。

アカの耳がびくと立った。穴の口からまっくろい熊のすがたがあらわれた。  
と、さっと岩からひとびして、谷の方にころがるように走った。

アカがじっさまの手からとび出していた。熊のあとを追うのではなく、穴の中  
へまっすぐ入って行った。やや子の泣き声がきこえた。じっさまは穴の口から、  
「アカ、アカ」とどなった。アカはえりくびをくわえて出てきた。じっさまはや  
や子をうけとり、ごつごつした手でやや子を抱くと、熊の走って行った方角と反

対の方角に走った。

「そりや、鉄砲打ちが鉄砲忘れてくるとはなあ。たいていの山を見りや方角がわかるもんじやが、そんなときはっかりは、どこをどう走ったか、今もつてわからん。ただ目の前を走って行くアカの奴を見失うまいという気がなかったもんよ」

ひといき入れようと走るのをゆるめると、アカの奴は早くこいと吠える。谷を二つこえると、山の上に立った。うすぐらくなった下の方に、灯がぼつんと見えた。助かったと思った。

「そりや、山の上はまだ明るいもんよ、雪明りちゅうのもあつたしなあ」

うしろを見ると、今こえてきた谷一つ向うの山のいただきがすぐそこにみえる。ここまできてアカも安心したのか、じっさまのそばに寄って、やや子の顔をぺろぺろなめた。やや子はアカの耳をひっぱって、笑い声を立てた。

とつぜん、アカが体をのり出して、天に向けて一しきり吠えた。黒いかたまりが向う山のいただきで動いた。

「うおう、うおう、うおう」

熊の吠える声が風で運ばれてきた。じっさまはやや子を高くもち上げた。熊はもう一声吠えた。遠目のきかない熊だから、見えたかどうか知らない。かわりにアカも一声吠えた。きやつきやつとやや子が、じっさまの腕の中でさわいだ。

じっさまのてのひらがあつたかくなつた。ひたひたと、じっさまのてのひらにやや子のおしっこがもれた。

「ありや、やられた」

そのときになつて、ずうつとやや子を手の中に入れて走つてきたのに気づいて、いそいで、自分のふところに入れた。

「ここまでは来られまいぞ、アカ、もつと吠えてやれ」

じっさまがもういちど熊の方を見て、「ざまあみろ」と叫ぼうと思つたとき、「おや」と思いとどまつた。熊がこつちに首をふつているのだ。

「熊もわかつたんだな、わかつたんだ、わかつたんだ」

じっさまは、おらに見せないように、そつと涙をぬぐつたのを知っている。

「おめえのおとうだぞ、そのやや子ちゅうのは。なあ、わかるか」

それから、おらが何をきいても、じっさまはおらの頭をごりごりなでるだけで、ちつとも答えてくれない。ただ、じっさまのごつい手でなでられて、ずんずんねむくなってしまうた。

## からすぼたもち

むかしあつたけど。

村に、じさまと一人むすこが、貧乏だが気はよく暮していたつけど。じさまはむすこがめんごくくてめんごくで、

「おらも、このむすこがたよりだ、よいところに縁付けてやりたいもんだ」

と、朝もあけないうちから、村の鎮守さまにお詣りをかかさなかつたもんだ。

そんなある日、じさまが町さ用達しに行ったら、村はずれの地蔵さまの前に、子どもらがむれていた。みたら、毛も生え<sup>お</sup>ないからすの赤子を<sup>あかこ</sup>巣がらみとつて、

「七匹いるから、どう分けたらよかんべな」

と、いじりまわしていたと。

「こりやこりや、赤子がかわいそうだ。おらが銭コやるから、そのからすの赤子  
を売ってくれないか」

「いいよ、また山に行けば、とれるからな」

じさまは用達しもわすれて、巢に入つた赤子を家にもつてかえり、ほら食べろ、ほらこれを飲めと、そだつのを待っていたもんだ。ようやく飛べるようになった十五夜の晩に、じさまはそつとふところに入れて、

「よいか、もう村にはくるなよ、また子どもらにいたずらされっからな」と、裏山の杉の根かたにおいてきたと。

それから何年かたつた。村一ばんの旦那さまのむすめも年ごろになつて、むこをとるこゝになつた。

田は千刈、畑も千刈、山という山はみな旦那さまの持ちものだった。

「田と畑のひろさはわかつてるが、山の木の数だけは、あんまりいっぱい、まだ数えたこともないが、おらも年だ、むすめにゆずりたいが、この山の木を数えられるほどのむこをもらいてえもんだ」

それで、村中さおふれを出したもんだと。

さあ、じさまは考えた。

「あの旦那のむすめだれば、おらのむすこのよめにちようどよい。といったとこ

で、あの山の木ば数える手もないし、同じ高さの木では目移りして、かぞえたてらんね」

それでも、じさまはあきらめ切れねもんだから、山さ出かけて行つた。

「南の山は杉林、こっち向いは松林、うら山のほうは栗林……」

とながめたもんだが、何ともなるもんでねえので、がつくりして帰り道に腰おろして、ほほ杖ついて、一人ごと語つた。

「旦那のむすめに似合いのむこなんか、おらのむすこのほかに誰があつか。おらのむすこのほかに、誰もあんまい」

そういつても、

「この山の木の数では、何ともなんねえ」

と、ますます、沈んでしまつたと。そしたら、頭の上から、声がふつてきた。

「じんつあ、じんつあ、いったいどうした。なんでこんな山の中にござつたんだ」

じさま、頭をあげてみたら、いつかのからすだつたんだと。

「いやいや、あの旦那のむすめのむこに、おらのむすこをやるべと思つたに、旦那

那の山の木かぞえねえと、むこにはならんねというもんで、みにきたがどうにもなるもんでねえ」

そしたれば、からすは、

「いや、おらの子どもが殺されつどこ助けてもらつたじんつあだもの、七匹もいるむすこが手分けして行つたら、わかるべ。じんつあ、ここで火たいて待つててくる」

といつて、うら山の方さとんで行つた。

「あんなこというけど、からすにや木の数はかぞえられねえべ」

じさまは、どうにもなんねと思つたが、火たいて待つていたと。

からすは家にかえり、七匹の子どもにいいつけた。

「なあ、お前らを助けてくれたじんつあの頼みだ、さあ手分けしてかぞえろ、杉林は、松林は……」

からすどもは、そつちやとび、こつちやとび、そつちやこつちやとび、たちまちのうちに、あのひろい旦那の山の木の数をかぞえてしまった。

「あっちの山の杉の木は、七万七千七百七十七本だ」

「そら、こっちの松林は、どうだった」

「松の木は五万五千五百五十五本だ」

「そうか、おらが数えた栗の木は、ちょうど三万三千三百三十三本だから、そんなにみんなで、ああ、こりゃたいしたもんだ。十六万と六千六百六十五本だな、さっそくじんつあに知らせるべえ」

と、親がらすが、山で待ちくたびれたじさまのところにとんだ。

「よいか、杉の木は七万七千七百七十七本じゃ。松の木は五万五千五百五十五本だ。それに裏山の栗の木は三万三千三百三十三本だから、あわせて、なんと十六万と六千六百六十五本だぞ」

それから、からすは、自分の黒い毛を抜いて、

「ほら、七本、これは杉林だぞ」

そして、胸毛を五本抜いて、

「これは松林のもんだ」

また、頭の毛を三本抜いて、

「栗林はこれだぞ。これをむすこに持たせて、旦那の家にむすめをもらいに行つてござれ」

じさま、泣かんばかりに喜こんで、家にとび帰つてむすこをよび、

「さあさ、早く行つてこお」

と、腰のおびにその毛をはさんで、旦那の家に行かせたと。

「うん、よくお前は数えたもんだ、一本ぐらいは数えちがいするべと思ったが、よし、おらの家のむこがこれできまった。めでたいこと、めでたいこと」

なんて、ほめらつた。

むかさりは村中総出で、にぎやかに、いく晩もいく晩も、万灯まんどのように明るくして続いたそうな。

じさまはたいへん喜んで、

「これもみんな、からすの手助けだ、ありがたいもんだ。からすだって、受けた恩は忘れたりしないで、こうしてくれた。おらも恩返しに、からすにぼたもちで

も搗いて食<sup>く</sup>わせるべえか」

と、とんことんこ、ぼたもち搗いて、

「大きく切つては食<sup>か</sup>れんめえなあ、ちっちゃく握つてやるからな」  
と、ぼたもちをちっちゃく握つて、屋根のうえさ供えたもんだ。

からす からす

小豆まんま 食<sup>く</sup>たがらば

御器<sup>ごき</sup>と箸 もつてこい

ほーい ほーい

いつのまにか、このことが村中のしきたりになってしまつて、毎年、からすに恩返しだといって、このからすぼたもちを供えるようになったんだど。

今でも二月八日の「ことはじめ」と、十二月八日の「ことおさめ」の日には、からすぼたもちを搗いて、畑さもつていつて、からすに食<sup>か</sup>せるようになったど。

とーびんさんすけ猿まなぐ、猿のまなぐに毛が生えて、けんけん毛<sup>めつこ</sup>抜きで抜いたれば、まんまん真赤な血ができて、めんめん盲目<sup>めつこ</sup>になったとき。

## 神 樂 ぶ ち

神樂ぶちの吉きちの生れは山国で、急な山肌にへばりついた部落だ。なだれがよくおきるので、ナダレ部落ともいうた。

山いももできない年に十三になった吉は、弟と妹のかわりに神樂に入った。そうでもないことにや、なじよにも御飯おまんまくいつめてしもうからだった。それでも手先の器用な吉は、すぐ神樂ばおぼえて、みんなからめんごがらった。

タンコタジマのタンタンタン

ブツコブジマのブツブツブツ

ピッピイのピイ

神樂の一座は、吉の芸がうまいもんだから、たちまち近所のひょうばんとった。

「吉の神樂はありがてえばかりでねえ、おもしれえ。このあいだも、人食い熊が吉の神樂で笑いころげて、腹へったのも忘れて、山さもどつて行つたちゅうこんだ」なるほど、吉の神樂はどこさ行ってもひょうばんになるのは、神さまの石舞台

でやった後に、部落中の一軒一軒ば廻<sup>な</sup>つて、夜泣きの子があれば笑わせ、病人があれば病人を笑わせて気をかるくして治<sup>なお</sup>し、山くずれで畑がうまつた家があれば、また畑をひらく手伝いしたり、村の人々といっしょに泣いたり、喜んだりしてくれるんで、毎年、吉の神樂が廻<sup>な</sup>つてくるのぼりたのしみにして、村人は待つてだもんだつたど。

「神樂ちゅうのは神さまば楽しませるもんだもの、人が楽しまねえと神さまも楽しくないもんだものなあ」

三年ぶりで吉が生まつたナダレ部落のお天王さまさ神樂をお納めにやつてきた。そしたらお祭りのノボリ一本立つてね。

「こりや変てこなこともあるもんだ。お祭り忘れるなていうこともないべになあ」  
走るように自分の家の戸を叩いたげんども誰もいね。となりの権六さの家に  
行つてみたげんどもいねえ、三軒目に戸叩いたカネばさまの家で、いちぶしじゅ  
うきいてびつくらした。

「なあ、吉。おめえ、どうにかしてくろよ。米がとれね部落さ、米年貢出せざあ、

いったいどうしたごんだ」

カネばさまの帯はナワの帯だ。ナワの帯は死人がでたときばりだときいてたげ  
んども、

「米年貢も出せねえ者あ、帯などナワでええ」

役人はいうたそうだ。「ナワの帯ざあ葬式どきばつかりだ」と、庄屋さまが役人  
に訴えたら、「こげな部落はつぶつたほうがええ」と、一人ばり残さつたカネばさ  
まはぶんぶん口をとんがらせた。

「それでも、おらあこの山越えて、あつちの殿さまのどこまでは、とつても歩か  
んね」

「よし、ほんじゃ、おらがつれていつてやる」

「いやいや、あそこの番所を通らねで山の中の道では、とつても歩けねえ。おらあ、  
ここでじつとしてで、ここの土になるべえ」

「そんではおれが、ばさまがらみ背負つて行つてやるべ」

たった一枚、長持の中にあつた新しい山仕事着をちよんと風呂敷さ包んで、腰

さぎつちら結ぶと、その上さ、カネばさまば、ちょこんとのせて、吉はピタピタ足で音立てねように、番所の前さきた。

「こりや、おめえはナダレ部落の吉だな、どこさ行く」

「神樂もつて、となり部落さ出かけるどこだに、お役人さま」

「おいおい、背中のばさまはカネばさまでねえが。神樂ぶちはええが、カネばさまは村を出てはいけねえ」

吉は困ったかおで、風呂敷つつみからヒョットコ面を出した。

ああ、ホラシヨ コラシヨ

タンコタジマのタンタンタン

くるつと一回まわると、ヒョットコ面から鬼の面を出して、カネばさまにヒョットコ面をかぶせた。

「おらあ、頼光さまがこねえば、他のだれがきてもおつかなくねえ。女どもをよおなこべ。酒もつてこい。ウィーツ、その者、女どもをよべ。よしいうときかねえな、このヒョットコ面を、おれはさらって行くぞ」

また、くるつとまわったら、オカメの面。

「オホホのホ。オホホのホ。あらお役人さん、ここのホッペの紅の色、最上<sup>もがみ</sup>の川の水でそだった紅花しぼったこの紅で、オホホのホ」

またまた一まわりすつど、カネばさまは面をとって、

「安達が原の黒塚に、かくれ住みしもあさまになりぬ」

吉の、さびた山うばの声で、役人は二歩、三歩とうしろにさがったすきに、とつとつとつと、番所の坂をくだって行つた。

「ああ、カネばさまば一人のこしてきた」と心配していた部落の衆が、喜んだことと喜んだこと、吉に助けらつたカネばさま、

「いやいや、山うばはそっくりだった」

というど、吉は、

「本当に山うばになってしまったと思つて、心配した」

というんで、カネばさまから、吉はうらまつたそうな。ドンピンカラリン、スツカラリン。

## すずしい風がくされた

むかしはな、寺の和尚さんおしょうと小僧つ子が、よく勝負したもんだ。

和尚さんは冬のさむい北風を、うまくつかってやるべとて、大きなカメを買ってきて、山から吹きおろしてくる北風を、

どんどろ吹いてこい

がたびし吹いてこい

というて、みんなカメの中につめこんでしまったど。どうすんのかと思つてみてたら、そいつを納屋に、奥ふかく入れておいたと。

冬がすぎ、春がきて、春がすぎ夏がきたころ、うだるようなあつい日に、お経をよんでかえった和尚さん、

「ああ、おれはやっぱり頭がいい、すずしい風でウチワもいらぬい」

というて、一人でこっそりカメのふたを少しあけては、着物をはだけて北風を入れた。

「どうれ、ほんじゃらば、次の仕事に行くか」

和尚さんを見送った小僧は、

「おかしいな、こんなにあつい日に、すずしい顔してるなんて、和尚さんばりうまいことしてるんだべ」

小僧が和尚さんのへやさ行ったらば、汗かいてるカメがある。そいつに手を出すと、ひやりっこ、ひやりっこする。

「ははあ、こいつだな。和尚さん一人、うまいことしてる」

と、思つて、小僧がちよつとフタに手ふれると、フタはするするのするつとすべつて、中からすうーつと、すずしい風がでてきたから、たまらない。小僧は和尚さんの衣を腹こらもの上にかけて、ぐっくりねこんでしまったもんだ。そのうちに、鼻ちようが一つふくれて、パチン。またふくれてパチン。また小さくふくれてパチン…。

いいきもちでねむつてるうちに、腹にかけて衣もずりおちて、へそがまる出しになつてしまったところに、カメから出たふぶきの晩の北風が、カメの一ばんそ

こちら出てきて、へそに吹いたもんだ。おもわず「ハクシヨン、ハクシヨン」とやったもんだで、自分のくしやみにおったまげて、目さましたと。

「ありやりや、こんじゃ、和尚さんにごしやがれる、なんとしたもんだか」

と、いそいでフタをしたが、そのときには、カメの中の北風はからんからんに出てしまつて、中からはつぽだったもんだど。こまつた小僧はうなだれて、お釈迦さまのある本堂に行つたら、お釈迦さまは、「へ、へ、へ」と笑うもんだで、「こいつあ、カメの中に屁を入れておけていうんだな」

と、小僧はカメに尻かけて

ぷーとやったら　ぷー

ペーとやったら　ペー

ぽーとやったら　ぽー

さまざまな屁をカメの中につめて、いそいでフタをしたもんだど。

そのうちに和尚さんが帰ってきた。

「どれ、今日もすずしい風でゆつくりするかな、小僧、町までちよつと使いに行つ

てこい」

小僧をおっぱらうと、奥のへやでそつとカメのフタを少しずらしたど。そうしたら、どうしたことだ。すずしい風のかわりに、今日は黄色い風が吹いてくる。おかしいもんだと思つて、鼻を近づけると、ふんぷん、ふんぷんにおつてくるのは、屁のにおいだったど。ぶつたまげた和尚さん、

「こりや、おかしい。きのうまですずしい風だったに、このあつさで北風までくさってしまったか。なるほどこのあつさでは、たべものも悪くなる。冬からカメに入れたもんだから、くさってしまったんだべな」

汗ばたばたらしながら、和尚さんはウチワでばたばたしたもんだそうな。とーびんさんすけ、かっぱのへ。

## 八十一まい目の田

むかしあつた話だど。殿さまはお百姓に、

「田んぼになるどこは、みんな田んぼにして米を年貢に出すように」

というもんで、山のふもとのやぶまで田に作らせだど。んだからちっちゃな丘などは、だんだん畑みたいになって、お百姓はエツチラ、オツチラ、肥桶こいおけをかういで行かんね、それあそれあ大へんだったそうな。

そんな村に、となりの村からむこさまがきたど。むかしはへこぬか三升あれば、むこに入るな」というたもんだな、びんぼうな家からむこにきたもんだべ。

春になって、まだ雪がのこつてる山道をのぼったんだど。むこさまは、おどつあまからたのまつだんだど。

「あそこの山さ、うちの田がある。大きいのから、ちっちゃいのから、やぶの中にも二つ三つ、みんなで八十一枚の田んぼある。一人前の男なら、一日仕事でやらんなね」

そういわつて、鍬をかついで出かけて行つた。山道にかかると、カラスが杉のてっぺんで「アホウ、アホウ」と鳴くもんで、むこさまはごしやえで、

「おれがアホウかどうか、今からの働きぶりを見てからいえ」

とつぶやきながら、山の田んぼにつくと、うんとこしよと腰をおろして、田んぼを見わたした。ある、ある。大きい田んぼ、ちっちゃい田んぼ、草ぼうぼうの田んぼ、石ごろごろの田んぼ。ある、ある。からんからんに干上<sup>ひ</sup>がった田んぼ、べしやべしやに水につかった田んぼ。

むこさまは着てきたミノをぱつとぬいでねじりはちまきをキリツとしめて、むこのカッコいいどこを見せるべえと思つて、鍬をとつて、一番近い田んぼから、ざくざく、ぴしゃぴしゃ、がつがつとやりだした。

一枚二枚三枚、四枚。お日さまがまん中にきたころは、もう四十枚もたがやしてしまつてたけど。そこさ、きれいな着物でよめさまが、でっかいおにぎりとお茶をもつて、山道をのぼってくるのが見えた。むこさまはますますはりきつて、

「えいやあ、ざぐつ。えいやあ、ざぐつ」

とやったもんだ。

むかしは、ひどろ田うないは一人前の男、一日で一反うなわねばならないといったもんだ。ぬるりぬるりする田んぼに足を入れると、腰まで入ってしまうもんだ。だがそこはむこさま、よめさまの前でカッコいいところ見せようと、まっくろい土をはねあげ、はねあげ、たちまち、うなってしまう。次の田んぼも、その次の田んぼも、うなってしまうって、お日さまが少しかたむくと、

「むこさま、むこさま、手に出たママがいくつあるか、ちよっくら休んで、教えてみなされや」

そういわれて、むこさまはよめさまの出してくれたお茶をすすりながら、手をひらいてママを数えると、あることあること一つの田をうなうごとに、ママが一つの田をうなうごとに、ママが一つずつふえるというぐあいだったそう。

ようやく、お日さまが沈んで、そのかわりに西の山からお月さまの出たところで、田うないがおわったもんだ。

「ふうっ、こんでおらも一人前というもんだ。どれ、八十一枚あるといったな、

数えてみんべ」

むこさまが、マメだらけの指で山の手の方から数えはじめたど。一枚、二枚、三枚、四枚……七十八枚、七十九枚、八十枚。

「おかしいな、八十枚しかない。数えちがいだべ。もう一度数えてみることにすつか」

一枚、二枚、三枚……七十九枚、八十枚。なんと数えなおしても八十枚しかない。「こりや、きつとおやじさまの思いちがいだべ」

そういいながら、ひよいとミノをとると、そこからもう一枚の田んぼがあらわれたど。そんなに小さい田んぼまで殿さまは作らせたもんだかな。むかしは、なあ……。

## 私の民話再話論

話上手に聞き上手という言葉がある。民話は語り手と聞き手の対話でもあったから、聞き手が下手であれば民話そのものも意味を失なってしまうものだといえる。聞き下手をそしる言葉に、山形では、〈むかしはむつかえって、話ははんじけた〉というのがある。笑い話を聞く年齢層は、いわゆる若衆層であったから、聞き下手をそしる声も、きつと高い強い声になったろうことは想像できるというものである。

本格昔話の系譜から語られた笑い話の中には、ともすれば江戸小咄のような、住所不定の笑い話が多く、粹でギャグのきいた、いってみれば小市民的な笑い話が多かったように思う。そして従来の研究そのものが、本格昔話の重厚さに対して、笑い話に粹な笑いを求め、その粹さ加減で笑い話の価値を判定しようとした向きがないでもなかったように思う。「和尚と小僧」などは格好の材料になった一例といえるかも知れない。

しかし小市民の笑い話の中にあるものは、笑うことだけが唯一の目的でもあるかのような、ナンセンス話に見られる軽さみたいなものが中心である。農民の無知を笑いとばし、笑いとばすことによって、あたかも自分が高みに立っているような錯覚を抱く、そんなところに笑い話の味があるとも思っているような面がある。「馬鹿むこ話」から始まり、「屁たれ嫁」を通り、「八十一枚目の田」までに至ると、笑いは急にこわばりはじめる。一度聞き、二度聞きするうちに、その笑いは、自分に向けて笑いが集まってくるといった重い笑いになってくるのではないだろうか。夕方の薄暗くなった山手の、耕して天に至るといふ段々畑の中で、一枚、二枚、三枚……と数えている聲の姿は、次第に自分の姿に重なり、暗い歴史の中でただ黙々と耕し、百姓、畜生、モグラモチは上を向かず、下を向いて土を掘っていさえすればいいという米沢地方にある言葉とおりに、ひたすら土を見て暮さざるを得なかった農民の姿に重なってくる。

こう見てくると、農民の中に伝承された笑い話は一種の重さをもったものであったといえそうである。「寝太郎」話もあちこち聞いて廻ると、寝太郎という人

物に対する評価が二つに分れていることを知らされる。「寝ぼけ先生」などという言い方にも、すでに見られるように、ずるさを持った寝太郎像が一方にあり、みごとに長者の聲になる賢こさが描かれるが、他方長者をみごとに庶民の立場で打ち負かしてしまう寝太郎像を語るることによつて強欲な金持や小役人への反撥と怨念を見ようとするものもある。

東北の農民は鈍重だといわれる。その鈍重さは決して愚鈍そのものでないばかりか、鈍重さの中に秘められた鋭敏さを、十分に笑ひ話は示してくれているといえる。「てんつ（嘘つき）」話に登場するほら吹き連中は、まさに農民が創造した最も愛すべき連中にちがいない。だが濁酒の粕を粕の葉に上げておくと雀がやってきて粕をくい、酔って葉の上に眠りこけてしまううちに、太陽の熱で葉がくるくると丸くなって、雀を包んでしまうという嘘話を語つて、ほら吹き大会に勝ち、一年間の人足を免除してもらつたり、それが地名となつて、村人の共有財産になつたという、そんな語り振りには、単なる笑いを誘う話以上に、宿場町の助郷役としての出役という人足の負担の大きさをはねかえそうとする、農民の願いが込め

られていたにちがいない。フォニイとしての「ほら吹き」連中を創造することは、願望の裏返しであり、フォニイを転換点として、自分たちの幸福をより具体的に表現し、実現していかうとする意志の現われと見ることができる。

細々とした日常生活における不都合の集合体としての不満をはねかえす力というものは、一見ナンセンスそのものと見える昔話の中にも見られ、それが大話になる。「大杉の秘密」に登場する大杉の親分に対する、木か草かさえはつきりしない、みそはぎの不満が親分の大杉をさえ倒してしまう寓話の中に、きつと人々はおごる平家、おごる役人を見たことであろうし、誰しもが武士になるといわれるにいかない時代に、行き倒れの武士の装束をうまく剥ぎ取って武士となり、殿さまの姫を手に入れてしまう「ほら吹き」を語ることによって武士支配の社会への痛烈な批判を行ない、溜飲を下げたものなのだろう。

農民の生活の中での喜びとは、もちろん自分たちが手塩にかけて育て上げた稲が、作物が見事に開花し、すばらしい実を結んでくれることであつたろう。その結実のためには、日常生活において苦勞の連続であつたに相異なる。「弥兵衛どん

のうるしの木」の弥兵衛が自ら気狂いの真似を演じたのは、決して自分のためでもないし、あるいは村のためでもなかったのかも知れない。はつきりいえば、正気そのものであったかも知れない。あるいは：と私はこの話を聞いたときのことを思い出す。白鷹町の深山という部落は古い歴史をもつ部落である。そこには藤原時代に建立されたといわれる阿弥陀堂があつて、深山観音と呼び、岩手県平泉の中尊寺の建築をそのまま模したもので、京都の文化が東北に伝えられた初期の時代のおもかげが今も残っている部落であるが、その弥兵衛どんはのっ所りした大男で、常々部落の人々からは馬鹿といわれていた人物であつた。その人物たる弥兵衛どんと共に部落の人々は共同体の一員として生活をしていたことが誇りでもあつたと、青木さん（話者）が語ってくれたのを思い出す。そのような人物は村に部落にいつも居つて、ふだんは一緒に人足に出、祭りに参加したのである。「水の種」の百姓も、はるばる箱根権現まで水の種をもらい受けに参詣し、部落に帰るすぐ前に、失敗して水の種をこぼしてしまうのだが、人々は感謝こそすれ、決して非難などしない。

こう考えてくると、農民の間に伝承されてきた笑いの根源にあるものは、共感の笑いであつて、卑下したり、非難したりする笑いではない。この点で、江戸落語などの小市民の笑話とその本質において異なるものだといつて、決していいすぎではないだろう。

同じことは、生殖を根底においた、性についての笑い話についても言えることである。山形県下ではほとんど各農家に、木小屋といわれる農作業小屋があつた。地域によつて、藁仕事小屋といつたり、農具小屋などともいつているが、若衆が任意に集まり、藁仕事をやつたりする小屋であつた。だが他地域に見られる「若衆小屋」や「娘小屋」などとちがつて、村の組織に組みこまれているものではなく、三々五々、好きな若衆が集まり、藁仕事をやつたり時によつては雪降りのころ、餅あぶりをしたり、ちよつぱり酒をくらつたりする溜り場でもあつた。いつてみれば半ば公的に黙認された小屋であり、半ば未公認の、しぶい目で大人たちから見られた場所でもあつた。十五才ごろから二十才ごろまでの男衆の溜り場であつたといつてよいものである。男若衆はそこで村の娘の品定めをし、性につい

ても大らかな話に打ち興じ、心弱い友人を勇気づけたりもした。地域によっては若衆の中から音頭をとる人が出て御祝儀の進行をしてくれる場合もある。だから生殖にかかわる笑い話は決してそのまま淫靡なものにはならない。

山村に入れば入るほど、今でも大らかな性を語り伝えてくれる話者が多い。ダム建設のために村の半分が消え去った中津川というところは「花笠おどり」の花笠の主産地であるが、花笠が一枚できあがるまでに男と女、年寄りと子どもとの協力が必要であった。笠の原型である輪作りは男の仕事であり、菅草をとりつける「笠縫い」は女の仕事である。年寄りと子どもは編み上がった菅の端を包みこむ「ツツガラミ」をする。そして二メートル以上にも降りつもった雪の日に、同じ年令の人々があちこちの家をめぐり、あるいは順宿にして仕事をすすめてゆく。そこではその手間賃はすべて働き手である男も女も年寄りの子どもも働き分に応じてもらう。もちろん姑と嫁の問題がないわけではなかったろうが、しかし嫁は姑の前でも大声で語り合うことができたし、姑と一緒に、こんな「臼挽き唄」を歌ったものだと教えてくれたのは、百話をこえる昔話の語り手である西置賜郡小

国町に住む川崎みさをさん、高橋しのぶさんである。

へ 臼の廻るほど身は廻れども なぜか姑の氣に入らぬ

姑ばさまは鬼でも蛇でも かわいい殿御の親だもの

臼はやえがみおかまり来ない 廻りかぜだよ おえん婆さ

嫁は姑の悪口を唄にうたい、姑は嫁たちの歌をきいては苦笑していたものだったという。「姑と嫁」の笑話や「屁たれ嫁」の話は、一面では大変深刻な状況を想像させながら、他面ユーモラスであるのは、語られる状況を炉端から木小屋に移したときには、むしろ嫁の豪氣ぶりを語るといふ傾向に近づいてくるとみることもできそうである。

大地に足をおろして、大地のめぐみの中から米を作り、野菜を作っている者たちの生産者としての誇りは、やがて木小屋の中から社会へ向けられて行く。雑俳をたのしむ若衆もあり、農業の未来に目を向ける若衆もあつたし、さらに矛盾した社会の体制へさえ向けられて行った例も多かった。各地にのこる「快盗譚」は義賊を心の中に育てて行った。馬鹿な真似をしながら、小役人をあざむく話とも

なった。そして実在のひょうきん者に仮託して、山形にも「佐兵ばなし」が生れたといえる。地元の米沢市近郊の露藤に行くと、高橋佐兵次という人の墓があるといい、その細かい資料が集められ、戸籍簿が作られている。再婚した母に連れられて、母の婚家で苦勞し、若者になってようやくつかんだ幸運が、旅侍に横恋慕した妻の失踪によって一夜にして不幸のどん底に陥され、生涯を下男生活で終えた彼の放浪の一生は、それだけで一篇の話になろうというものであるが、その地が天領と上杉（米沢）の私領の間にあったというところで、ある時は天領になり、ある時は上杉領に組み入れられるという歴史上の不運と重ね合わされて、「佐兵ばなし」が生れてきたのであろう。「悲恋の佐兵」という口説き節が俗謡として歌われたほどであるから、そういう人物を重ねて、旦那衆や金持ち連中への反撥や役人に対してたちまち狡猾者になる話は当時の村人を喜ばせ、勇気づけさせただろうことは想像にかたくない。

口説き節はこう歌う。これぞと思った妻が男と逃げ出した後に残された佐兵は、

泣いて涙もはやかれはてる

あわれ無残な佐兵の姿

死ぬか生きるか二つに一つ

やがて佐兵は氣をふりおこし

どうせ逃れぬ化転の娑婆よ

命長くも百まで生きぬ

人の苦勞も女人在元よ

女人禁じて暮そうならば

洒脱円満苦のない浮世

そうじゃそうじゃと心に決めて

---

村の鎮守の白髪神社

杉の古木の八町御門

やがて神前の緒ふれば

塵も邪念も迷いも晴れて

澄める心は真如の月よ

女人禁斷誓いを立てて

佐兵一生の願いがござる

とても此の世は八苦の世界

人を益すも仇にはならぬ やんれー

と、覺悟をきめて村人と共に苦勞し、絶えず村人に生きる喜びを教える。「酒の籠抜け」で役人をうまくだまし、「シラミ五升の質入れ」で金持をやつつける。だが佐兵の本領が発揮されるのは、木小屋に集まった若衆との話であろうか。ある

いは若衆との連帯において幻の權威や権力にしがみついている小役人や金持の醜惡さを糾弾する佐兵の姿に、村人はかっさいしたのかもしれない。

なるほど、いろりのなくなつた今の農村では「佐兵ばなし」すらも生彩を失なつてしまつたようである。「薪がばりばりと音立ててな、ぐずぐずと大鍋に大根や蕪や諸を入れてな、そいつをつつきながら喋つたもんだ」と、ある「佐兵ばなし」の話者は、木小屋の生活を思いおこしながら語つてくれたし、「佐兵みたいな人は部落に一人はおつたもんだ」という人もあつた。

笑い話は貧しい生活を余儀なくされている自分からの解放であり、また自分ががんじがらめにしぼりつけている家や村や体制からの解放でもあつた。そして笑いは明日の力にもなるものであつたろう。だから笑い話を聞いた者たちは、次に古老を招んで高度な技術を要するミノとか藁靴などを編むことを習うのも忘れなかつた。古い伝承された村の伝説にも耳をかたむけ、庚申講をはじめ虚空蔵講や山の神講で日待や月待の精進も忘れなかつた。稚拙な文字で中折の紙に記録された「まじない」の呪文を山の中の村で見せてもらったことがあるが、それが四代

も五代も受けつがれてきたものであることを知って、おどろきを新たにしたことがある。そしてその老婆は、今も時々病人があれば出かけて行って、どくだみの葉で膿の吸出しの処方をしてくれたり、まむしの目玉を持参して煎じては高熱にうなされている子どもに、その汁を飲ませて熱をとってくれるということだった。その老婆の話は忘れられない強烈な印象である。

その部落は江戸時代からワツパを作ってきたところだが、ワツパ作りもまた冬の手間仕事で、ブナ材を伐り、それを割り、削っては板にし、その板を大釜で煮て手で曲げ、合せ目を桜皮で縫い上げて作り上げる。囲炉裡にはいつも赤々と火がもえ、そのまわりには五種類もの刃物が転がっている。孫がのそのそ這い出してくるのは大変に危いので、どこの家にも台所の板敷の隅に掘りコタツが切つてある。老婆はそこで孫がさわぎ出さないように昔話を語るのが仕事だったという。ちよつとでも子どもがさわぎ出すと、主人から声がかかったという。「うまく昔を語らないから、さわぐんだ」といわれて叱られたものだから、「一生懸命語ったもんだし、話がなくなると困るもんだから、茶のみ話に老婆が集まっては、昔を語

り合つたもんだ」という。

伝承というものが、単に遊びの中で行われたのではなかったということが、それでもわかるというものである。このような伝承の重さを、どう民話の再話に生かすということが再話者の基本なのではないかと思う。笑い話が本格昔話よりも軽いという考え方が、大いなる誤解に発していることは、すでに訂正されつつあるが、逆にいわせればそういう誤解をしつづけてきたのは、受け手である現代の読者というよりはむしろ再話をしてきた人たちの罪なのではなからうか。大地に根をおろし、かたくなに苗を育て、畠をたがやしては植付けをし、雑草を猫のように体を丸くして、日なが一日、一本一本抜いては、水をかけ、苗の一本一本に声をかけては撫で、その成長を願う人々の愛情と、その人たちが背負ってきた地理的条件やら歴史的条件をこそ再話の中で、現代に伝えることでなければならぬと思う。しばしば民話も再話も一時の腹ふたぎのオヤツと考えられてきた。しかし現代は民話が主食でなければならぬことを、再話を通して確立したいというのが、私のねがいである。

あとがき

今まで、「もんぺの子」や『山形新聞』の「山新みんわ」に、須藤克三先生や山形童話の会のみなさんの尻おしでのせていただいた〈創作民話〉や民話の再話を集めたものであるが、表題とした「ちようじやのむこ」は『母の友』二月号（51年）にのせていただいたものである。また「私の民話再話論」は一声社から出版された『出羽の笑い話』の「あとがき」として書いたものであるが、比較的に率直に私の再話についての考えが出ていると思ったのでのせた。みなさま方の御批評がいただければありがたい。

武田 正

昭和51年1月10日

ちようじやのむこ

昭和51年1月15日 発行

編者 武田 正

山形県南陽市三間通  
232の3

山形短期大学民話研究センター資料叢書

ちようじやのむこ

\*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十年十二月二十四日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）  
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）  
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）  
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）  
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）  
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）  
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）  
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）  
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）  
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）  
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）  
『佐兵ばなし』（一九七二年一月発行、二〇〇七年四月再刊）  
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）  
『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）

- 『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』

(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)

『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』（一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊）  
『さるむこ 田沢の伝説と昔話』（一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊）  
『ちようじやのむこ』（一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊）

